

私の樺太（サハリン）での戦争体験

池田 弘

1. はじめに

戦中、終戦、戦後の昭和という時代の流れの中で、出会った様々な貴重な戦争体験について、かつて15年にわたる悲惨な出来事、馬鹿らしいこと、おかしかったこと、不安で恐ろしかったこと、泣いたこと、助け合ったこと、騙されたこと、食糧不足でひもじい思いをしたこと、ロシア人との交流生活の体験などを、次の世代に伝え、平和の^{とうと}尊さを改めて考えるべき時期なのではないのか、と思うこの頃であります。

まず、私が生まれた樺太（現：ロシア連邦サハリン州）の歴史を簡単に述べると、日本人の最初の樺太上陸は、寛永12（1635）年の松前藩主・松前公広^{きんひろ}による巡見使派遣に始まる。文化5（1808）年、江戸幕府が踏査隊^{とうさたい}として間宮林蔵と松田伝十郎を派遣。明治8（1875）年、樺太・千島交換条約（ペテルブルグ条約）。日露戦争勝利後の明治38（1905）年、ポーツマス条約が結ばれて南樺太の日本とソ連との国境が画定。昭和18（1943）年、日本本土に編入という流れになる。

樺太（からふと）

オホーツク海南西部にある島。現ロシア連邦サハリン州。日露戦争後の明治38（1905）年、ポーツマス条約により、北緯50度線を境界に南北に分割され、南樺太については、昭和26（1951）年のサンフランシスコ講和条約によって放棄させられるまで、日本領であり、行政官庁として樺太庁が設置され、管轄していた。

松前 公広（まつまえ きんひろ）

1598-1641。松前藩の2代藩主。寛永12（1635）年に樺太調査隊を派遣した。

間宮 林蔵（まみや りんぞう）

1780-1844。江戸時代後期の探検家。文化5（1808）年、幕府の命により松田伝十郎とともに樺太を探索。「間宮海峡」を発見し、樺太が担当ではなく島であることを確認した。

松田 伝十郎（まつだ でんじゅうろう）

1769-1842。江戸時代後期の幕臣・探検家。文化5（1808）年、幕府の命により間宮林蔵とともに樺太に渡り、西側を伝十郎が、東側を林蔵が海岸沿いに船で探索した。

私は南樺太^{みなみからふと}の生まれ。家族は父母、子供は私、妹二人、弟一人。小学生時の生活は戦時軍国主義体制（隣組、大政翼賛会、大日本国防婦人会）にあり、登下校時には奉安殿^{ほうあんてん}への最敬礼が課せられた。

隣組（となりぐみ）

昭和 15（1940）年に、「部落会町内会等調整整備要領」（隣組強化法）によって制度化された、国民統制のための地域組織のこと。隣保班（りんぼはん）が正式名称であるが、隣組と通称された。市区町村の下単位として、5軒から10軒の世帯を一組とする隣保班が設けられ、戦争協力のための、配給、供出、動員など、行政機構の末端組織としての役割を果たした。昭和 22 年に解体。

大政翼賛会（たいせいよくさんかい）

昭和 15（1940）年 10 月に第 2 次近衛文麿内閣によって、新体制運動を推進するために創立された官製国民統制組織。全政党が解散し、これに加わった。総力戦争を遂行するために一国一党制を実現させようとしていた軍に対し、国民各層を結集して軍に対抗できる強力な国民組織をつくろうとした。総裁には首相が、各道府県支部長には知事が就任、行政補助的役割を果たした。昭和 20 年 6 月、国民義勇隊へ発展的解消。

大日本国防婦人会（だいにっぽんこくぼうふじんかい）

昭和 7（1932）年 12 月に発足した民間の婦人団体。その後、軍の支援を受け全国に活動が広がった。割烹着にタスキがけが正式の会服だった。国防献金、出征兵の見送り、傷病兵の送迎、慰問袋作り、兵営や陸軍病院での洗濯奉仕などの活動をした。



美唄町国防婦人連合会美唄分会役員（昭和 15 年）

昭和 17 年には愛国婦人会、大日本連合婦人会とともに統一され、「大日本婦人会」となった。当時の美唄町では、各地区の分会に分かれていた国防婦人会が、昭和 13 年 11 月に「美唄町国防婦人連合会」に統一された。

教育勅語が重視され、防空訓練下の燈火管制や避難訓練が頻繁^{ひんぱん}に実施されるようになった。
私が生まれた川上村^{かわかみむら}（シネゴルスク）は炭鉱町として栄え、終戦時には日本人や朝鮮系の炭
鉱労働者を中心に人口約1万人を数えた。

教育勅語（きょういくちよくご）

正式名称は、「教育ニ関スル勅語」。明治23（1890）年発布。昭和23（1948）年廃止。明治天皇が教育に関し与えた勅語で、政府の教育方針を示す文書。紀元節（2月11日）、天長節（天皇誕生日）、明治節（11月3日）及び1月1日（元日、四方節）の四大節と呼ばれた祝祭日には、学校で儀式が行われ、全校生徒に向けて校長が教育勅語を厳粛に読み上げた。その写しは御真影（天皇・皇后の写真）とともに奉安殿に納められていた。

燈火管制（とうかかんせい）

夜間の敵機来襲に備え、爆撃の目標にならないように、明かりを消したり、黒い布で電灯を覆ったりした。

昭和 20 (1945) 年 4 月 2 日、ソ連は日本に日ソ中立条約の不延期を通告し、8 月 15 日、戦争終結の詔書（玉音放送）が発せられた。樺太全島にソ連軍に対する白旗掲揚指示が出されたが、8 月 22 日、豊原が空爆され、400 戸が焼失。その後、日ソ停戦協定が成立し、樺太はソ連の占領下に置かれた。8 月 23 日より、樺太島民の抑留生活が始まる。9 月 1 日、全樺太の日本軍の武装解除が終了した。その後、北樺太・シベリアへ約 1 万 3 千人の兵隊が移送され、そのまま抑留されることとなった。

昭和 21 年 1 月 7 日、函館引揚援護局が設置され、同年 12 月 5 日、樺太からの第一次引き揚げが開始、真岡港を出航し函館に向った。

昭和 21 年 12 月から昭和 25 年 1 月までの間に、31 万 2,452 名の樺太在住者が日本に引き揚げた。

2. 終戦と引き揚げの時のこと、樺太の戦争体験を語る

○戦時中、終戦、戦後、帰国引き揚げ、開拓の体験（小 1～小 5～中 3）

終戦の時、私は、サハリン（樺太）の豊栄郡の川上炭山の川上炭山国民学校 2 年の夏、今から 70 年も前のことなので、地名や年月日など、記憶の薄れている部分がありますが、当時樺太に住んでいた時の体験を思い出しながら、書いてみたいと思います。

当時、私は炭鉱六軒長屋の社宅に住んでいた。昭和 20 (1945) 年 8 月 15 日は学校から早く下校し、父も早く帰宅し、ラジオで終戦の玉音放送を聞いていた。南樺太は、面積 3 万 6,100 平方キロ、関東七都県と山梨県を併せた広さ。住民は約 40 万人と公称。昭和 20 年 4 月、島民の食糧を 41 万人の 1 年 6 カ月分確保。終戦時の人口の概観としては、終戦前後に樺太庁による計画引き揚げ約 8 万人、死亡 9 千人、密航及びソ連抑留者を加え、約 10 万人減とされる。その後、昭和 21 年、5,600 人。同 22 年、1 万 6,800 人。同 23 年、1 万 1,400 人。同 24 年 4,700 人となる。

玉音放送（ぎょくおんほうそう）

昭和 20 (1945) 年 8 月 15 日正午、天皇陛下が戦争終結の詔書を朗読したラジオ放送。前日の 14 日、御前会議でポツダム宣言受諾を決定し、連合国側に伝え、日本は無条件降伏した。詔書は、あらかじめレコードに録音されていた。

樺太庁の疎開^{そかい}計画は、弱者の老人・幼児・婦女子優先のものだった。ソ連占領軍の意図は青壮年層の生産労働力、なかんずく、技術者の確保である。引き揚げ当時の日本国内の事情は、内地の主要都市は米軍機の絨毯爆撃で焼野原と化し、昭和 20（1945）年の米作は、東北地方の天候不順もあって不作であり、日本本土内は外地からの引き揚げ者の安住の地ではなかった。

さて、終戦前後の川上炭鉱の状況は、人口約 1 万人、炭鉱長屋の隣組では、内地からの疎開者、東京、大阪、四国、九州、沖縄、中国人、半島人（朝鮮人）などの家族と一緒に暮らしていた。

○私の人生の最初の戦争という実体験の記憶について

我が家の家族は、父（坑内電気工事の仕事に従事）、母、私、妹二人、弟の六人家族。

昭和 20 年 8 月 20 日、ソ連軍の突然の北緯 50 度線の国境を突破の侵攻により、真岡港へのソ連軍の軍艦^{かんぼう}の艦砲射撃の大砲の音が、山越えでドドーン、ドガーン、ドガーンと山びこを繰り返し、山鳴り、地響き、砲撃^{ごうおん}の轟音が伝ってきた。閃光と火煙^{せんこう}が上がり、子ども心に恐怖と不安と、これからの将来の行方に不安を覚えて身震いをする。家の裏には防空壕が掘ってあり、中にはわずかな非常食等が備蓄されていた。また、8 月 22 日の豊原の町への爆撃の時には、私の住んでいた川上炭山からも、上空を爆撃機が 2 機、戦闘機が 1 機、大きく巡回して爆弾が投下され、まず閃光が、それからしばらく間をおいてから火煙、それから爆発音がドカーン、ドドーンと響いてくるのが見聞された。

絨毯爆撃（じゅうたんぱくげき）

集中爆撃、飽和爆撃ともいわれる航空爆撃法の一つ。大編隊を組んだ大型爆撃機が絨毯を敷くように目標一帯にすまなく、徹底的に爆撃すること。

防空壕（ぼうくうごう）

空襲のときに避難するため、地中につくる地下壕。職場や学校、家の庭などに、穴を掘ってつくった。

その時、豊原の町には緊急疎開のため、豊原駅前広場に多くの老人や婦人、子どもが集まっていたが、爆撃によって、その中から多くの犠牲者が出た。停戦交渉成立から2時間以上経過してからの惨事である。

当時、豊原の町は、3万人ぐらいの樺太奥地からの疎開者、避難民でごった返していた。私はこの空襲の少し前に、父と疎開先である幌内保（父方の祖父の所へ私が一人で預けられていた）より川上へ連れ帰られた。その時に、豊原の町を通った。当時、樺太には第八八師団（要兵団）を中心に約3万人の兵力がいた。この美しい自然に囲まれた樺太国境の町の平和も、8月9日朝、ソ連対日参戦によって一方的に破られた。

わずか2週間の戦闘で亡くなった将兵700人、邦人の戦災死1,800～2,000人。留萌沖では潜水艦の攻撃で樺太からの引き揚げ船三隻が大破、沈没し、死者・行方不明者が1,700人。樺太の終戦時の総人口は45、6万人。その中から2週間に4,200～4,600人の死者を出したことで、樺太の不幸の大きさがわかる。この自衛戦闘の間に、7万8,000～8万人の邦人が本土に引き揚げた。

そして残された人々には、占領下の新たな労苦が続く。ソ連軍によって捕えられ、遠いシベリアに送られて、ついに肉親のもとに帰らなかった人たちも多い。

戦争とは、軍隊と軍人だけのものと思っていたが、台風のように一切を巻き込んだ悲惨なもので、想像を絶する姿である。民間人、老若男女、大人、子どもも皆、危難を受け、犠牲になる。ある一人の死は、近くにいた一人の記憶によって、生々しく、現実のものとして浮かび上がる。

疎開（そかい）

空襲などの被害を少なくするために、都市の住民や建物などを地方に分散することを「疎開」といい、昭和19（1944）年8月からは「学童疎開」が始まった。都会の少年少女たちは、親類などを頼っていく「縁故疎開」や、学校などでまとまって行く「集団疎開」などをし、家族と離ればなれの生活を余儀なくされた者も多かった。

○終戦時の川上炭山での出来事、武装解除について

山越えて国境付近の戦場から脱出してきた兵隊たちは、炭鉱の会社の寮の前の広場横に一列に整列し、ソ連兵の監視の下で、銃や装備、兵器を供出させられた。その後、列車に乗せられ、シベリアに強制連行・抑留され、あの極寒の地で強制労働をさせられた。

そして、残った住民の家宅搜索、点検、家族調査が始まる。ソ連兵が銃剣とマンドリン銃を持って、役人と朝鮮人の通訳と日本人の案内人を連れて、土足のまま、室内を物色、怪しい人物、危険物、ラジオなどを没収する。大変恐ろしい思いをした。

また、日本人たちも終戦のどさくさに紛れて、奥川上村の軍用倉庫を破り、貯蔵保管されていた衣料品、毛布、食料品などを盗み出すため、老若男女一家総出で、村中の名士、役人、教師も皆、誰彼なしで背負い、担いで、ある人たちはトロッコに積み、鉄道線路の上を押し、引っ張って運んできた。しかし、その後ソ連軍から、盗んだ物資の返還命令が出て、皆が驚き慌てふためき、返還する人、土に穴を掘って埋めて隠す人など、さまざま、大騒ぎだった。

終戦処理が終わり、治安が回復するにつれて、ソ連側の進出が始まり、本国からたくさんのロシア人家族と僅かな物資が運ばれてきた。しかし渡来するロシア人の中には、靴のない裸足の粗末な身なり、手荷物など何も持たず、南京麻袋の中に着替えが少し、洗面器とコップと食器洗いを入れて担いだ人たちが多くいて、豊かではない国情を代弁している印象を受けた。ただ、ソ連国民の民族と人種の雑多性には驚愕した（文化、言語、宗教、毛髪、眼の色、衣服など）。

ソ連の民間人の家族を、半強制的に日本の社宅の家に割り当てて同居させる事態になってきた。家の周囲には日本人、朝鮮人、中国人、ロシア人の家族が混在して生活するようになった。学校生活も変化し、教室の割当も、日本人、朝鮮人、ロシア人の学級に分割された。子どもたちの間でも、日本人は敗戦国人として馬鹿にされて喧嘩をよくやった。

マンドリン銃（じゅう）

第二次世界大戦時にソ連で開発された短機関銃。直径約 20 センチのドラムマガジンを装備した独特の外観で、両手で持った姿が楽器を演奏する姿に似ていることから、ドイツ軍は「バラライカ」、日本軍は「マンドリン」の名で呼んでいた。

治政の面では、ソ連の共産主義政治に反対する者は、重い刑罰に処せられる。ソ連の国は多くの人種を抱え、また二億の国民のうち、共産党員はほんの一握りしかいないという状況の中で、これらの国民を統率して共産主義政治を行っていくのは容易なことではない。

○働かない者は、食うべからず。

職業選択の自由、住所の移動は制限され、職場の無断欠勤は、刑法違反で刑務所（チョマン）行きとなる。住民査証（パスポート）を発行されて、常に携帯せねばならなかった。レーニン、スターリンの肖像、ポスター、写真、赤旗（ソ連国旗）に対し反対、侮辱する者は、即逮捕、処罰される。労働者に対する物資配給制は、各職場に配置され、勤務を終えて帰宅する時に購入して帰る。品目は黒パン、バター、砂糖、タバコ等。ただし、上級職は白パンを食べていたが、下級職は黒パンだった。メーデー、戦勝記念日など国家の祝日には特別配給（菓子、チーズ、バター、ウォッカ）などがあつた。また、食用に馬や牛を連れてきて、山中で屠殺しているのを見た。

私の住んでいた村にロシア人がパン工場を作ることになった時、日本人が主に使用していた火葬場を解体して、そのレンガを使用してパンを焼く窯場を造つた。そこで出来上がった角黒パンを食べて生活をしてきた。パン工場から職場の各売場までは、女の人たちが角パンを袋に入れて運んだ。売場には、女の主任がいて、ロシア製の大きなソロバンと分銅秤が置いてあつた。坑内からの仕事帰りの男女が、真っ黒く汚れた顔や衣服のまま、裸の角パンを小脇に抱えて帰るといふ様子だった。タバコは、刻みタバコを新聞紙等で巻き、唾液でぬらして、巻タバコにして吸つた。

○食糧の買い出しの思い出、川上の村から

豊原（現：ユジノサハリンスク）まで、私（小3）と妹（小1）が、近所のおばさんやお姉さんに連れられて、晩に夜行列車に乗って行つた。列車の運行時間は不規則で、よく遅れた。また、列車内はたびたび停電し、真っ暗になるので、ローソクを座席に立てたりした。

朝早く、豊原の駅に着いて、街の売店が開くのを待って、列に並んで食糧や黒パンを買う。その時、ロシア、朝鮮の大人たちが列に割り込んできて、つまみ出されることもあつた。

ルーブル紙幣やカペーイカ硬貨を持って、買物会話はすべてロシア語でなければならなかった。片言のロシア語を手まね、ジェスチャーで用を足す。帰りには、買った食糧をリュックサックに詰めて帰った。また、遠い町まで出かける時は、パスポートと旅行許可証が必要であった。

また、昭和 20 (1945) 年 8 月 13 日、父と母方の叔父^{おじ} (三男) と二人で、叔父 (二男) が、樺太の北の国境の近くの大木駅前^{おじ}で戦死をして、その場で埋葬されているとの話を聞き、確認のため、終戦間際^{まぎわ}の騒然としている時に行って、その場で三人の方が埋葬されているのを確認、墓標^{ぼひょう}を見て、その土盛の場所を掘って遺体を検分し、遺髪^{いはつ}を少し持ち帰った。日本本土に引き揚げた後、昭和 24 年 12 月 8 日付で叔父の死亡告知書 (公報) が届いたが、結局遺骨はないままであった。

ソ連治政下の昭和 22 年頃、川上炭鉱での坑内ガス爆発事故が発生し、多くの死傷者が出た時、坑内にはロシア、朝鮮、中国、日本人が働いていた。就業体系で一番方、二番方、三番方となっていて、確か、夜番の時に事故が発生、山中、大騒動になり、隣り近所、知人の安否確認で、家族の者が不安、心配で大変だった。労働者は男女で同一労働、共同条件なので、皆同じヘルメット、同じ服装で作業し、顔も真っ黒になっていた。幸い私の父は無事だったが、知人、隣人の中には亡くなった人もいた。

○葬儀・葬列について

それぞれの国の習慣による葬儀の違いがあり、ロシア人はほとんどがロシア正教 (キリスト教) かカトリック。朝鮮人はキリスト教、仏教、無宗教者に分かれる。日本人は主に仏教、神道。葬列について、ロシア人の葬列^{ひつぎ}は柩を赤い布で包み、花輪を乗せて、音楽隊 (ブラスバンド) が行進曲を奏楽して行進していき、埋葬する。

日本人の火葬については、火葬場が解体されてしまったので、皆で薪^{まき}を作り、井桁^{いげた}に積み上げて、柩を乗せて焼く。その周囲を囲んで見物していたロシア人達が、火炎の中から遺体の手足が延びて、ニョキッと出て来たのを見て、皆逃げだした。

○ロシアの自由市場（バザール）について

道路に連なる広場に、木杭^{きぐい}を打ち立て、その上に板を釘で打ちつけた台の上に乗せて、自分の所有物なら何を売っても良い。自分の身に着けている衣類、靴、装飾品、時計、食物、果物、小動物（小犬、猫、ウサギ、小鳥）、家具、食器などである。午前、午後各1回、役人が取引税を徴収に回って来る。私と妹と二人で子犬、子猫、子ウサギ、モルモット、山から採って来たキノコ（ボリボリ）、衣類などを持って、お金または物々交換（コッペ）をしてきた。税の徴収を^{まぬが}免れるため、台の下に隠れたり、逃げたりもした。穀物などはコップで量り売りをする。ロシア人の^{こじき}乞食も居た。万引、盗人もお金を^す掏る人もたくさん居た。とても物騒で治安は悪い。引き揚げ残留邦人は皆、一日も早く帰国（ダモイ）を願って待ち望んでいた。

第一次、第二次、第三次引き揚げと、だんだんと日本人の数が少なくなって心細くなる。知人、友人、近所の人、先生なども引き揚げてしまい、学校も閉校されてしまった。しかし、職場の責任者は最後まで残された。病院の医師も居なくなり、怪我^{けが}人や病人が出ると、古来の民間療法や宗教による^{きとう}祈祷、おまじないが流行し出した。それでも、しばらくすると隣り近所、職場の人たちと知り合い、子どもたちもロシア語、日本語で互いに友達になり、各家を訪問して遊んだりした。

○私の家族の引き揚げについて

昭和23（1948）年10月5日、帰国が決まり、7日に出発。持参する手荷物（重量一人当たり^{かんめ}八貫目（約30キロ）まで）を大急ぎで支度した。ロシアのお金は持ち帰れないと知ると、着る物などを買って使ってしまった。写真、文書物など不審に思われる物は焼却処分して、食物、手荷物をリュックサックやヒモで背負って、^{ゆうがい}有蓋の窓のない貨物列車に5、6家族、35、6人が同乗して出発した。権太は冬が来るのが早いので、10月にはもう寒くなる。最終回前の引き揚げであった。

隣人、友人、知人の他、仲良くしていたロシア人たちの見送りを後にして、有蓋の貨車に乗り、5、6家族が一車両で、無灯火、無暖房、無トイレで進んだ。時々駅舎のある所で一時停車をして用を足す。トイレは混み合い、列車も、いつ発車するかわからず、心配しながら

ら皆、用を足していた。走行中はボロ布、新聞紙などを敷いて用を足す。

また、走行中に、連結が切れて、後方の車両が置き去りにされたため、途中で後戻りした。すると、後方車両の人たちが、人力で車両を押して追いかけてきた。また、豊真線の宝台ループ線のトンネルの中で列車が一時停車をしてしまい、2、3時間も暗闇の中で動けなくて、前方と後方から応援の機関車が来て、ようやく動きだした。そんなことが続き、なんとか真岡の収容所につき、第一収容所のバラック、テントにムシロを敷いたところに、何日も同じ服を着たまま寝た。手荷物も雨の中、テントをかけ、トイレも野天で、山の上の方に目も眩む7、8メートルもの深さの穴を掘って、板2枚をわたしただけで、隣はムシロで仕切っていた。落ちたら大変。うわさでは、子どもが落ちて死んでいるという。

収容所では身体検査や消毒を受けた。ベッドは元教室の中を蚕棚式かいこだなしきに区切っていて、汚れた部屋や廊下で寝起きをした。入所してからは、一日あたり300グラムの黒パンとスープ、少量の砂糖の配給があったが、それは苦渋くじゅうに満ちたものだった。ただ、収容所の炊事係の兵隊の中に、親戚の人が居て、少し余分にパンなどを貰ったりした。

いよいよ引き揚げとなると、乗船の時に再び身体・荷物検査を受ける。船に乗るときは一列に並んで片方の手に青いスタンプ、降りるときは赤いスタンプを押す。引き揚げが生まれて初めての乗船だったためか、妹と弟二人が体調をくずし元気がなくなり、両親が心配していたが、乗船してからハシカに感染していることがわかり、船の病室に隔離入院させられた。

私たちの場所は船底の最後部で、プロペラ、スクリュー音がゴウゴウ、ガラガラと、うるさかった。外の海は大荒天で、函館入港の予定が、急遽きゅうきょ小樽港に避難入港することとなり、外港に泊まった。

ループ線

鉄道を敷設する際、高低差の大きな箇所、線路を螺旋状（らせんじょう）（ループ状）に迂回（うかい）させて距離を長くすることで、勾配（こうばい）をゆるくする方法。勾配区間で力の落ちる蒸気機関車の時代には、必要な方法だった。螺旋部は通常トンネルとなる。

バラック

空地や災害後の焼け跡などに建設される仮設の建築物。急造の粗末な建物。

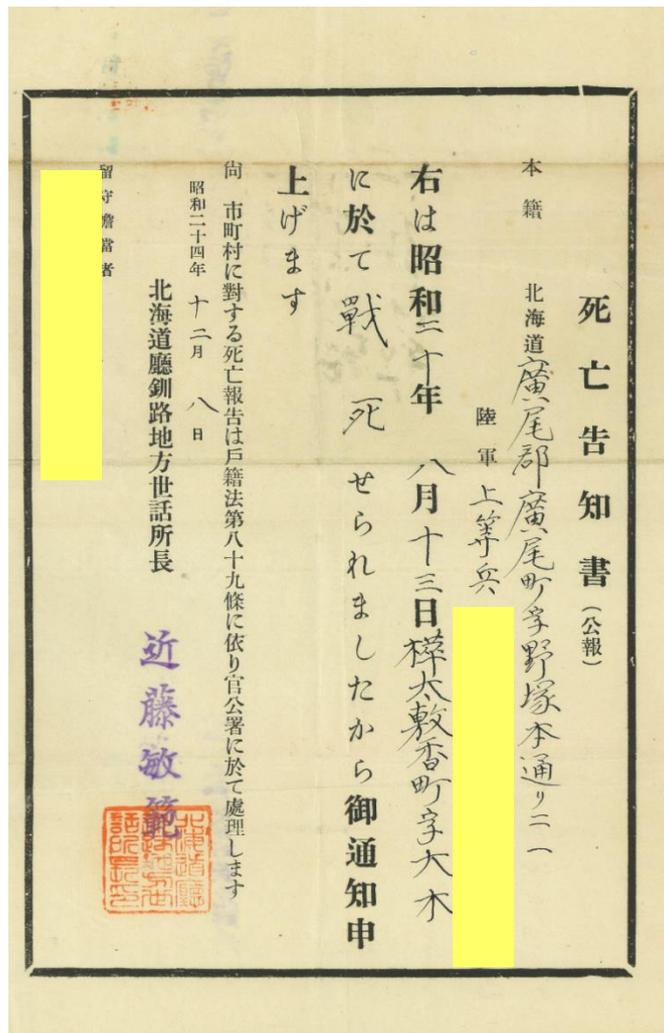
翌日、小樽を出港。航海中、船は前後左右に揺れ、船酔いで気分が悪く吐き気を催し、ただ、トイレは船上の階にあるため、梯子階段を手すりにし、すがりついて昇っては、雑魚寝の人の上に振り落とされるのを繰り返した。食事は握り飯、イモ、カボチャのみそ汁などで、船が揺れて鍋がひっくり返るなど、ひどい目にあった。

函館入港後、母と妹、弟は法定伝染病（ハシカ）のため検疫病院へ行き、父と私、もう一人の妹は引き揚げ者の寮に入り、病院と寮を往復した。人手が足りなかったこともあり、看病のついでに、父は病院で使う薪切りを頼まれたりもした。入院していた知人の子ども達も衰弱していたので、ジフテリア、ハシカなどで次々死んでいき、何度も葬式を出した。

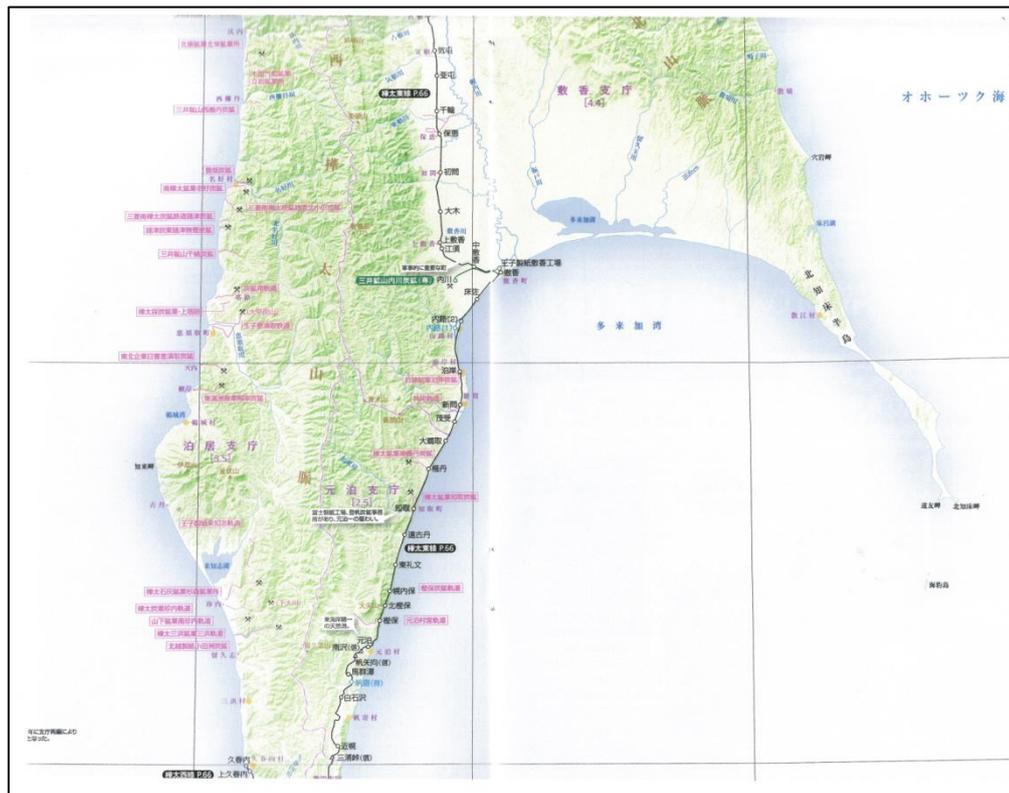
父はその後、三井鉱山の芦別炭鉱、第二抗（頼城）に行き、坑内で落盤事故が起こるなど危険な目にたびたびあい、鉱山での仕事をやめる。

その後、もともと帰国前より父の念願であった、自分の家族の食べる物は自給自足で作りたいたいという思いから、道内での戦後開拓地を求め、一家で美唄市字上美唄原野に入植した。

(いけだ ひろし 昭和 12 (1937) 年 旧樺太・豊栄郡川上村生まれ)



池田さんの叔父の死亡告知書 (池田弘氏提供)



南樺太の地図 (池田弘氏提供)